

あ と が き

例年がない寒さ，全国的な鳥インフルエンザ，そして新燃岳の噴火。何という一年の始まりでしょうか。そのせいで外に出るのも億劫になりがちです。

そこでDVDを借りてきました。『ドクター ハウス』という一話完結型の米国TVドラマシリーズ作品です。昨年TBSで放映されていた『GM 踊れドクター』の元になったのではないかと思わせる異色の医療ドラマでした。主人公のDr.Houseは『Everybody lies (患者は嘘をつく)』と言って診察することをきらい（といっても部下は診察して情報をとってきます），試行錯誤を重ねながら，医療推論を重ね，仮説検証をおこなって，最終診断というか治療成功までたどり着きます。

患者の話をよく聴き詳細な身体所見をとって仮説を立ててから検査に進むといった，現在診察の王道と思われる診療工程からは大きく逸脱し，また浅薄なヒューマニズムにおもねらないその診療スタイルは生身の臨床医からするとずいぶん荒唐無稽な話と思われるかもしれません。まあドラマだからねと言ってしまえばおしまいですが，一方捨てがたい魅力が主人公の医師とその診療過程にあるのも事実です。ことさら『患者様と呼んで』医療サービスを強要する市場主義的医療現場に対するアンチテーゼのようにも思えます。

ちなみに第一話は癲癇発作を繰り返す若い女性が脳腫瘍・脳血管炎等の仮説病名治療の果てに，最終的に患者の家を搜索した結果，脳寄生虫症とわかる話でしたが，それは私の昔のボスが得意とした話だったのでことさら印象深く鑑賞した次第です。

(編集委員長：三倉 剛)

あ と が き

啖呵売（たんかばい）というのをご存じでしょうか。昔の縁日や路上販売などで独特の話術で物売りさばく商売のことで、いわゆるバナナのたたき売りやガマの油売りなどがその代表です。今でも時々デパートやテレビショッピングなどで似たような実演販売を見ることがありますが、さすがに最近では路上販売をする人は見なくなりました。

その中で、私が子供の頃、年一回くらいの割合でやってくる印象的な路上販売のおじさんがいました。その人物は背広にネクタイ姿で大きな鞆を両手に持ってその場所に現れます。そしておもむろに鞆の一つを開け、中から身長50センチほどのロボットのような人形を取り出します。まずその辺で遊んでいる子供や通行人たちが足を止め、それから彼は訥々と語り始めます。彼は某博士が苦労して発明した人の言葉をしゃべるロボットを預かり、それを地元の子供たちに披露しに来たのだが、諸般の事情でなかなか実現することが出来ないでいる等々。そんな話の合間に色々な手品を見せ、いつのまにか自分が胃腸の調子が悪く長年苦しんでいた話、そしてある薬草の本を読んでその通りに服用したら見違えるように良くなった話に至るのです。結局の所、聴衆はその薬草の本を買わされてしまうのですが、肝心の言葉をしゃべるロボットの披露は、出発のバスの都合があるとかで省略され彼はそそくさとその場を立ち去ります。もちろん彼はロボットを披露する気など最初から無く、本を売るのが目的で、彼の語り口にまんまと乗せられたというわけです。

私は以前、靈感商法とか催眠商法のように通行人を集め騙して法外な価格で粗悪品を売りつける詐欺商法について個人的に研究(?)したことがありますが、当時の路上販売はそんな悪質なものではなく、一種のエンターテインメントでした。最近ではレトロブームとかでバナナのたたき売りなどを再現するイベントもあるようです。でもそんな見世物ではなく、語り口は静かでも緊張感あふれる復刻版ではない啖呵売を見たいのですが、もう絶滅したのでしょうか。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

テレビといえば、もっぱらNHK。特に最近はBS-hiだ。なかなかいい番組が多いと思う。先日もBSベストオブベストで『小野田寛郎インタビュー(再放送)』をやっていた。彼の生涯をたどってみれば、負けん気の強さと合理主義精神には感服せざるを得ない。事の正否に種々意見もあるだろうが、活動し生きつづけた様子は、現代のわれわれに、『目標を持って生きることが生命力の原点である』事を教えてくれる。と同時に、われわれが先達の智慧の上に生活していることを思い起こさせてくれる。ジャングルの中では、衣服の繕いに使う針の代用品さえないのだ。

そこでネジの話を出した。螺旋の発明は古いが、締結用具としてのネジの発明は比較的新しい。医学でいうと注射器の発明に似ている。戦国時代に種子島銃がもたらされたが、その筒底に使われていたネジ。当時の日本にはネジという発想もネジを切る方法も存在せず、苦勞してその技術を獲得したという。また時代は下り、維新时期にアメリカを訪問した小栗上野介はワシントン海軍工廠で手に入れた一本のネジを土産として持ち帰り、日本の造船技術発展の礎としたという。

いまやネジは標準化され世界共通の規格で運用されている。生産性の向上と云うことでは新しい技術が世界に広まり、競争を経た後、標準化されていく。これ世の慣わしというべけん哉。さてさて医学や如何。

われわれが日医生涯教育で基本的臨床医学の知識技能の研鑽に努める原点もその辺りにあるのではないだろうか。座学のみならず、画像・動画・ハンズオン等々をもって、標準化が進められている。一つの基準としてのガイドラインもある。医師のさじ加減ということ、医師の裁量ということが最終ラインとして守られるためには、一定基準の担保が必要で、それがこれら基本的臨床知識技能であろう。私たちは今も専門領域のみならず、医者としての基本的知識技能を日々磨いているのである。

(編集委員長：三倉 剛)



火縄銃の尾栓に使われたネジ
(大友氏遺跡フェスタ2009にて)

あ と が き

前回も書きましたが、私の診療所の近くに大衆演劇の劇場があります。

どの旅回り劇団も、演目は概ね笑いあり涙ありの芝居と歌謡ショーが中心ですが、劇団の集客力には随分差があります。それぞれの劇団には眉目秀麗な若い二枚目看板スターがいて、そのスターが劇団の人気を大きく左右しているのです。彼らは歌謡ショーの時に、煌びやかな衣装の女形になって艶やかに舞います。最近ではテレビなどでもそういう大衆演劇のスターが舞い踊る姿を目にすることがあるのでご存じの方も多いでしょう。

しかし彼らの人気を左右するのは、その容姿や舞の上手さだけではありません。もちろんこれらは必要条件なのですが、それだけでは多くの熱狂的なファンは付きません。大衆演劇は公演後に、劇団員が劇場のロビーでほぼ扮装のままお客様をお見送りするいわゆるファンとのふれ合いの場があります。ここでファンの熱い思いを醸成することでスターの人気を高めます。重要なのは、集まったファンのご婦人方に視線を返しながらか周囲にもくまなく言葉をかけていく気配り能力です。そして熱心なファンは何度も劇場に足を運びますから、舞台上からファンの女性を見つけ流し目を送るといった高度な技術もまた必要なのです。

そうすることで熱狂的な女性ファンが生まれ高額なご祝儀をつぎ込むようになります。最近では少なくなっているようですが、時には老後の蓄えをすべてつぎ込み、借金までしてしまうというファンもいたそうです。また熱心なファンはいわゆる「追っかけ」となって、劇団の固定客にもなります。一時は衰退傾向にあった旅回りの劇団ですが、最近では若いファンも増えているそうです。

以上が私の診療所を訪れる劇団員や劇場関係者から聞いた話です。劇団は一か月毎に入れ替わりです。月末になると舞台が終わった夜10時頃より、劇団員総出で荷物をトラックに積み込み、次の公演地に向け出発します。煌びやかな世界の陰で黙々と働き、そして粛々と移動する劇団員の姿になぜか心惹かれてしまう私です。

(編集副委員長：吉賀 攝)

あ と が き

先日、江田島の旧海軍兵学校を訪れる機会があった。

司馬遼太郎『坂の上の雲』の一つの舞台であり、本木雅弘演ずる秋山真之が大講堂で兵棋演習するシーンなどの撮影があったようだ。

有名な生徒館などをツアーで見学して歩いたが、チリーつなく静寂に包まれ、生徒館の色あせない赤レンガや内部の整然とした佇まいは明治以来の形式美の極致と思われた。

いわゆるシーマンシップの3S精神（スマート・ステディ・サイレント）を地でゆく建築群と拝見した。それらは以前訪れたアナポリスの米国海軍兵学校とどことなく似た雰囲気をもっていた。

しかし、人事を含めた海軍士官の運用に関しては、特に昭和期において、我彼の差は歴然としていたといわざるを得ない。それは、米国においては思い切った人事登用や作戦失敗時の責任追及がしばしば行われたのに対し、わが国においてはハンモックナンバーによる人事の硬直的運用、責任追及が皆無に近いなど陸海ともにお粗末としか言いようがない。一方米国のそれにおいては目を見張るべきものが多い。たとえばミッドウェー海戦時におけるR・スプールアンス提督の登用あるいは重巡洋艦インディアナポリス撃沈時の艦長に対する軍法会議等枚挙に暇がない。

太平洋戦争で日本は、決して物量だけに負けたわけではない。

かくして、米国・中国の2大国にはさまれた平成日本は、どうした舵取りをすべきだろうか？そうした中長期の日本の行く末を年末のNHK『坂の上の雲』を観ながら考えてみたいと思う今日この頃である。（『坂の上の雲』第2部はNHK総合で12月5日より毎週日曜日午後7時30分より全4回放送予定）

（編集委員長：三倉 剛）



あ と が き

私が小学生の頃まで自宅のすぐそばに旅回りの劇団がやってくる小さな劇場がありました。当時はあまり娯楽のない時代だったので繁盛していたようですが、昼間は休演しているので劇場は地元子供会の集会場にもなっていました。退屈な子供会が終わると他の子供たちはさっさと帰ってしまいましたが、私はそのまま居座って夕方の部の芝居を見るのが密かな楽しみでした。何しろタダで芝居見物が出来るのと、小学生の子供が保護者無しに見るのはあまり好ましいことではないという風潮の中で、この日ばかりは堂々と観賞できるのだから正直嬉しかったのです。

その内容はほとんどが笑いと涙の時代劇で、客席との掛け合いでアドリブ満載、なぜかミュージカルみたいに歌や踊りも有りでした。しかもその歌が芝居の内容とは不釣り合いな当時のやり歌だったりしても合いの手やかかけ声、おひねりまで飛び出してお客は大喜び。めくるめく照明と大音響の中で役者たちが演じ、客たちが泣き笑いする光景は少年の私でも何とも言えない興奮を覚えるのでした。

劇団員の中には私のクラスに一時的に転入してくる子もいて、その子たちの勉強を手伝い、休んだ子のために宿題や教材を届けるのも私の役目でした。そういう時は劇場の楽屋に堂々と入り、その子たちと劇場の中を遊び回っていました。その時に見た表向きのきらびやかな世界とはあまりに対照的な現実の姿、コミカルに演ずる役者が舞台裏で見せる恐ろしいまでの気迫など、当時の私には大いにカルチャーショックを受けたものです。

鉄輪温泉にはヤングセンターという小劇場があり、昼夜二回開演しています。今でも歌や踊りを織り交ぜた大衆演劇ですが、これが案外面白いので一度ご覧になってはいかがでしょうか。

(編集副委員長：吉賀 撮)



あ と が き

『缶コーヒーのボス新CMと医師の生涯学習』

さてさて皆さん突然ですが、缶コーヒーのボス新CMをご覧になりましたか？スカイツリーと東京タワーにかけて、会社の新旧社員がメールの打ち合わせと対面打ち合わせのよしあしを論じるもので、結局両者大事という話です。宇宙人役のトミー・リー・ジョーンズがいつものようにいい味を出しています。

このCMを観て、昔の上司を思い出しました。部長のY先生は教育熱心で、教え好きでしたが、後輩から教わることも多いと、後輩の意見にも耳を傾け、われわれが積極的に勉強するように勧めました。

また最近『Dr 宮城の教育回診実況中継』という本を読みましたが、この中でカリスマ医療教育者の宮城征四郎先生は、沖縄県立中部病院の同僚、レジデントとともに患者から学んだ生きた知識を披露しています。

日医生涯教育制度の変更で医師の生涯学習が再びクローズアップされていますが、基本にはこうした同僚間や師弟関係による教育があるのだと思います。新旧織り交ぜた知識と経験の共存が、生きた学習効果を生むのではないのでしょうか？

最後に脳神経外科 kongress のロゴをお見せしましょう。ラテン語で『ancora imparo』とあります。『私は今も勉強している』という意味だそうです。

(編集委員長：三倉 剛)



あ と が き

私が担当した前々号に引き続き地元ネタをもう一つ。

写真は近所のひょうたん温泉にある温泉冷却装置です。地下からわき出てくる温泉は高温で、そのままでは熱くてとても入浴できないためにこのような装置が必要になりました。こんな装置のない普通の家庭では、お湯に水を加えて温度を下げて入浴しています。お湯を止め、冷まして入浴すれば良さそうですが、実は問題があります。温泉にはカルシウム塩など各種の成分が溶解していて、給湯配管で冷えるに従って成分が析出し、いずれ配管を詰まらせてしまうという困った性質があります。その配管をバルブなどで止めるとさらに析出はひどくなっていっそう詰まりやすくなるのです。つまり温泉は垂れ流しの状態にしておくことが安定供給には必要なのです。

さらに、家に温泉を引いた浴室を作る場合、地元では必ず別棟にします。そうしないと常時流れる温泉の熱気と水分によって建物は傷み、ほとんど例外なくシロアリの巣窟です。私の診療所も先々代の祖父の時代には離れに温泉を引いた浴室がありましたが、シロアリ被害と温泉のメンテナンス上の問題で取り壊してしまい今はガス給湯の風呂になりました。古くからの地元の人たちには温泉を引いた浴室は同じ棟に作らない、詰まりやすい温泉給湯の配管は交換が容易なように屋外に露出させて設置するなどの生活の知恵がありますが、他から移住して当地に新居を構える方々の中にはそれをご存じない方もいるようです。以前、県外の業者が作った宿泊施設がこの問題に直面して経営不振に陥ったという話もあります。つまり「郷に入りては郷に従え」という格言ですね。

昨今医療の分野にも外部から制度改革の圧力が増してきました。しかし実際に医療を行う当事者の頭越しに制度を変えようとする動きが最近目立ちます。このようなことが続けば、シロアリにじわじわと食われるごとく、いずれ医療も瓦解してしまいそうです。

(編集副委員長：吉賀 攝)



あ と が き

私事ながら臼杵市医師会の丸岡伸比古君は宮崎医科大学での同窓同門。また君は漫画から音楽まで多芸多才。彼が映画『孤高のメス』を観て、「その臨場感たるや、昔立っていた手術場に今いるかのような迫力があつた」との感想をメールしてきた。

さてさて、その昔、『ER緊急救命室』と『シカゴホープ』、『レスキュー911』といったアメリカTV番組の医学的メッセージについて比較検討した論文が「The New England Journal of Medicine」に掲載された。論文の骨子はERでの心肺蘇生は外傷によるものが圧倒的に多く、心疾患が多い現状とは異なったメッセージを視聴者に送っているとの批判であった。確かそれに対する反論も掲載されたと思う。日本においても「病院」(医学書院)という雑誌の本年5月、6月号で渡部幹夫先生がそのあたりを詳しく解説されている。

かくいう私も専門以外の知識を(いわば偶然に)こうしたメディアに求めることも多い。「ためしてガッテン！」(NHK)がそれだという人も多いことだろう。私の場合は、「ドクターG」(NHK)や漫画の「JIN - 仁 - 」(集英社)がそれにあたるか？

前述の渡部幹夫先生など医療監修者の力量が高いことが、番組の質をぐっと上げている。こうした番組を通して臨床のイメージやカンを身につけることは決して悪くない。通り一遍の講義だけが学習ではない。できれば日医の生涯教育の単位にしてもらいたいくらいである。

(編集委員長：三倉 剛)



あ と が き

「地獄原」は私の診療所そばのバス停で、珍しい名前のためか旅行者が写真を撮っているのをよく見かけます。ここ別府八湯の鉄輪地区では高温の蒸気が激しい勢いで噴出する温泉が多く、この噴気のことを地元では地獄と呼んでいます。付近では噴出する泉源が多いので当地を地獄原と呼ぶようになったのでしょう。そのため高温の噴気を利用して調理する「地獄蒸し料理」がこの辺では昔から有名で、私が子供の頃は地獄蒸し用の竈の設備が近所にはたくさんありました。当時から地獄蒸しは日常的な調理法として地元の生活に溶け込んでいたのです。今は別府の海の幸、山の幸を地獄蒸しで料理する贅沢な料理になっていますが、当時はトウモロコシやサツマイモ、サトイモなど近所でとれた素朴な食材が定番でした。それでも地獄で蒸した熱々をいただくのはとても美味しかったのを覚えています。残念な事に維持管理の不便さから、最近ではどちらかというと観光用が中心になって、調理用に地獄を使う家庭はずいぶん少なくなってしまいました。

このように地獄は地域の生活になくってはならないものですが、高温の蒸気による熱傷事故も時々起こります。この熱傷は熱の曝露が短時間なので浅達性 度熱傷程度がほとんどですが、創面が広がってしまうという特徴があります。最近では優れた創傷被覆材によって速やかな疼痛の緩和や処置の簡便化が進みました。しかし、当院のような内科系診療所で対処できるのはせいぜい四肢の浅く部分的な熱傷に限られ、それでも局所療法として創面保護のための処置は大がかりになってしまいます。

最近一年間で鉄輪地区はずいぶん整備され、足湯、蒸し湯、地獄蒸しなど観光設備も充実し観光客も増えてきました。鉄輪にお越しの節は、ぜひ地獄蒸し料理を楽しんでいただきたいのですが、蒸気でやけどなどしないよう係員の指示を必ずお守りください。

(編集副委員長：吉賀 攝)



あ と が き

表紙の写真は現在建設中の東京スカイツリーです。平成22年3月29日その高さが338mとなり、東京タワーのそれ(333m)を凌駕したと報じられました。来年12月には完成して634mとなり、再来年4月開業となります。東武鉄道が建築主で、テレビ局が利用する高さ世界一の自立式電波塔(になる)ということです。都営浅草線押上駅A3出口を出て、右手を見上げますと写真のような光景を目にする次第です。

さて、隅田川を挟んで浅草の対岸、向島にある押上地区は森鷗外先生一家が津和野より上京して暮らした最初の地です。先生の父、森静男が津和野藩主亀井公の御典医であった関係でその屋敷近くに住まわったということです。『しずか母・セクスアリス』には当時のことが、主人公金井湛の回想という形で描かれています。

ところで昭和20年3月10日(陸軍記念日)の東京大空襲で、この鷗外旧居址にあった本所高等実践女学校(現本所高校)の校舎も焼け落ちています。もちろん大正11年に60歳で石見人/森林太郎としてこの世を去った元陸軍軍医総監が焦土と化した旧居址を目にすることはなかったのですが。そしておよそ90年後のこの東京スカイツリーです。

今日の混迷を深める日本の政治、医療崩壊と呼ばれる医療体制の中であって、もし鷗外先生が時間移動してこの東京の新しいランドマークを目にするならば、大鉄塔を見上げて何とつぶやくであろうか。とても興味あるところです。

(編集委員長：三倉 剛)

あ
と
が
き

平成22年度から広報を担当する三倉でございます。今後とも県医師会報を単なる情報伝達手段にとどまらせることなく、会員福祉、意見交換、外部への情報発信の場にしたいと考えています。

さて今回の診療報酬改定におきましても、厚生労働省からの情報発信は、その主体がインターネットに軸足を移しております。しかも告示・通知等の発令24時間以内掲載を目標にしている等の言を伺いますと、お上においても情報の速さを意識していると感じざるを得ません。また種々の医療コンサルタントの診療報酬改定に関する情報発信がネット上で乱れ飛んでいます。それも玉石混交と思われませんが、少なくともネットが情報発信および交換の主体になりつつある感は否めません。また日医生涯教育におきましてもeラーニングと呼ばれるネット上で講義を聴き質問に回答する形式がスタートして、少しずつコンテンツ(内容)が増加しています。一方、新聞雑誌さらにはテレビまで、それらマスメディアの衰退が盛んに言われております。メディア全体の比重がネットへシフトしているようです。

そうした中、月一回発行の雑誌である会報の意義について改めて考えさせられます。

どういう役割が期待されるのか？皆さんにも御一考いただき、意見をお寄せいただきたいと思います。

また今年度より大分県医学会雑誌の発行が休止されます。大分県医学会は存続しますので、口演を論文にしたい場合の受け皿を大分県医師会報が引き受けることになりました。つまり情報交換雑誌から、それと論文掲載誌のハイブリッドになるということです。同様の形態は他県医師会報にも数多く見られます。会員の実地診療に役立つ論文の投稿を期待しております。

県医師会館4階の部屋には各県の医師会報が数多く取り揃えられています。転載された医師国家試験問題を解いたり、会員から投稿された玄人はだしの写真などを見ていると、随分刺激されるものです。今後とも魅力的な会誌作成を目指してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

(編集委員長：三倉 剛)